

サキタマ王権論へのプレリュード

— 埼玉稲荷山古墳と高崎市八幡観音塚古墳の関係性をめぐって —

利根川章彦

1 はじめに

埼玉古墳群は、5世紀後半になって武蔵北東部の低台地地帯の中に突如として現れる。そのため、過去の研究においてはその出現の位置付けをめぐって、『日本書紀』安閑天皇紀元年閏十二月是月条に記述されている、いわゆる「武蔵国造の乱」との関係から考察しようとした研究者が多かった。たとえば、甘粕 健氏は、古墳時代前期から大型古墳の卓越する多摩川流域の勢力と埼玉県域の勢力の対抗の図式で理解し、埼玉古墳群を造った勢力をこの記事における「武蔵国造笠原直使主」、多摩川流域の勢力を「同族小杵」と考えた上で、古墳時代後期における勢力交替と大型古墳群の消長が符合することや、鈴鏡分布圏が東京から群馬まで及ぶことと「上毛野君小熊」—「小杵」の政治的関係を結び付けて理解しようとした(甘粕1970)。甘粕氏の研究が非常に示唆的で構想も大きな研究であったため、その後、類似した認識に立って関東地域に関する主要古墳動向を論じる研究者が多かった。このような研究傾向については現在もさほど大きく変わっていないと思われる。

しかしながら、一方では、近藤義郎氏を中心にした大がかりな共同研究組織である前方後円墳研究会がまとめた『前方後円墳集成』によって全国の前方後円墳の悉皆調査が行われた記録が明らかとなり、さらにその後各地で結成されたローカルの前方後円墳研究会(東北・関東、中・四国、九州)の研究活動を通じて、主要前方後円墳の墳形や年代の見直しが進んだことによって、関東における大型前方後円墳の築造における最も大きな画期として、西暦5世紀後半頃から6世紀初頭前後頃のあたりの時期を考えた方がよい、という主張が多くの中堅・若年世代の研究者から出されるようになった。

私もそういう動向のはしくれに属するものとして、埼玉古墳群を中心とした埼玉・群馬の各小地域の大型古墳築造動向と年代論に触れた小論を二、三執筆し、小誌の前身である埼玉県立さきたま資料館の『調査研究報告』に掲載させていただいたことがある。この時の結論は埼玉古墳群を含む武蔵地域全体及び上野地域の双方とも西暦500年前後、600年前後に古墳築造史上の大きな画期があり、あくまでも大型古墳築造の視点からでしかないが、考古学的には「武蔵国造の乱」は虚構であるといわざるをえない、ということであった(利根川2002・2003)。

しかし、その時の作業を通じて痛感したのは、群馬地域の各古墳の情報を個別に収集しきれなかったため、『前方後円墳集成 東北・関東編』(近藤1994)や東北・関東前方後円墳研究会作成の大会報告資料集等に頼らざるをえなかったことであった。

本来こういう研究を遂行するためには、各地域の地元で積み重ねられた各古墳に関する遺構・遺物に関する詳細な考古学的情報の収集と、それに基づく綿密な分析が必要不可欠である。

そこで、本稿で意図していることは何か、ということであるが、埼玉古墳群と深い関係があると考えてよい各地の主要古墳(群)に関して、より詳細な比較検討をし、埼玉古墳群の出現や推移に関する史的意義を考察する際の裏付けとなる事実を積み重ねたい、ということである。

ただし、今回に関しては限られた時間の中での分析とならざるをえないため、小稿のみでは十分

とはとてもいえないし、議論の対象も極めて限定的であり、内容としても少々の外れではないかというそしりも免れられるものではない。

それゆえ、今回は議論の足がかりに少しでもなればよい、との意識で書くことにする。あえて小稿のタイトルに「プレリュード（前奏曲）」という言葉が付した所以である。

2 八幡観音塚古墳とその周辺

まず、八幡観音塚古墳とその周辺を取り上げる理由について説明しておきたい。

埼玉稲荷山古墳の礫槨出土遺物は数多いが、他の古墳との類例を探ることができる主なものとしては、馬具の中では①f字形鏡板付轡、②三鈴杏葉、③辻金具、装身具としては④龍文透彫帯金具、武器・武具では⑤挂甲などがあり、それなりに研究が重ねられている。何種類かの鉄鏃についても数少ない類例をあたる研究がある。しかし、これらの研究においては、直接的には今ひとつ大型古墳と大型古墳の相互関係に結び付けられる研究になってはいかないように思える。

もう1つ、取り上げることができるものに⑥画文帯環状乳神獸鏡がある。この鏡についても樋口隆康氏・川西宏幸氏らによる詳細な研究がある（樋口1980、川西2004）。

すでに、自明のことではあるが、稲荷山古墳と同型の鏡は5基の古墳から5面が出土している。群馬県高崎市八幡観音塚古墳出土鏡・千葉県大多喜町臺古墳出土鏡・三重県志摩市波切塚原古墳出土鏡・福岡県京都郡内古墳出土鏡・宮崎県新富町山ノ坊古墳出土鏡である。このうち古墳が特定されているのは八幡観音塚古墳と臺古墳だけである。

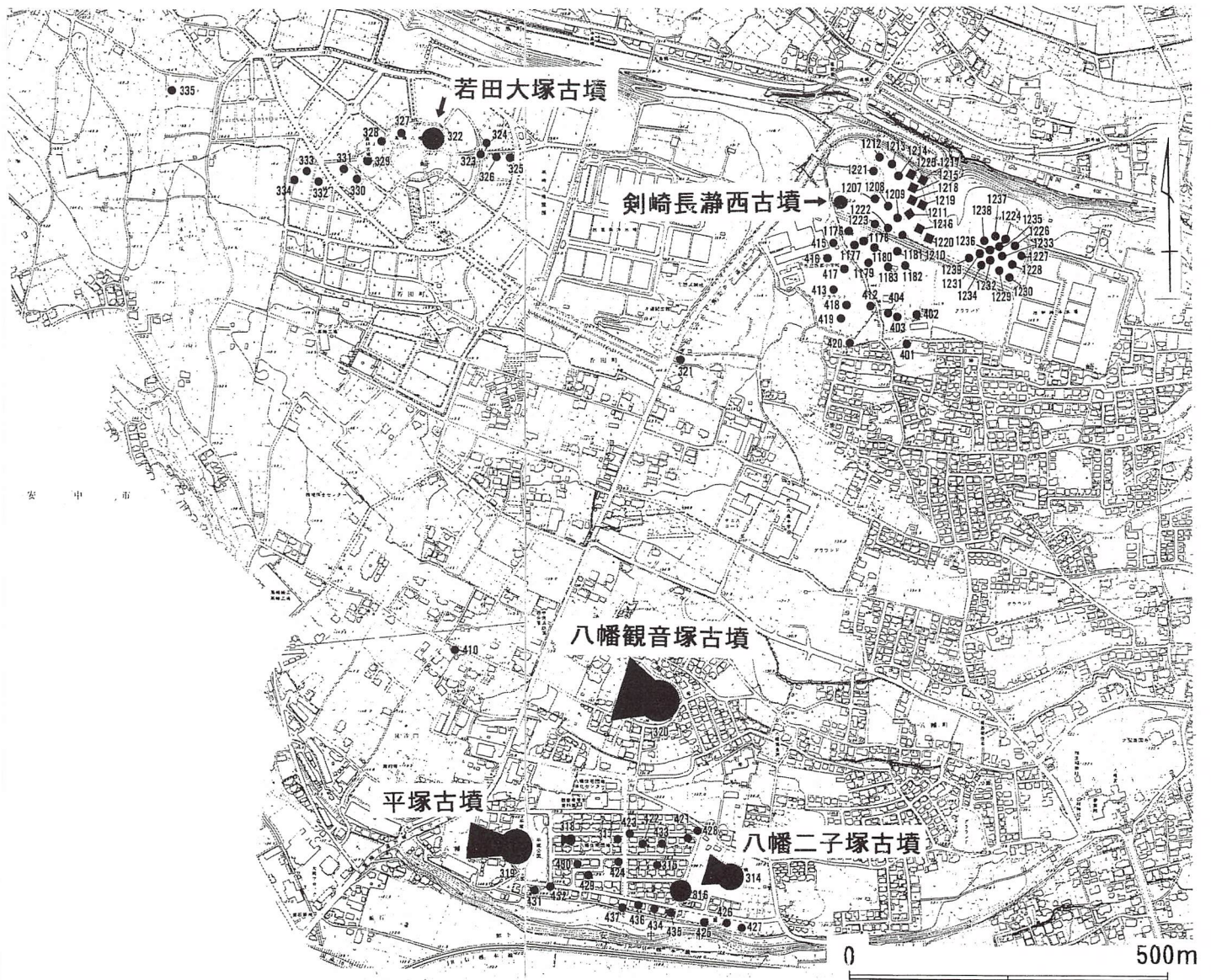
八幡観音塚古墳は6世紀末葉頃の築造と考えられている大型古墳である。稲荷山古墳被葬者との直接的交渉があった人物を葬った古墳ではないが、周囲に存在する古墳のあり方から考えれば、この古墳とその周辺を考えることによって、稲荷山古墳被葬者像を浮き彫りにすることができる材料を拾えるかもしれない。

そこで、まず本章で八幡観音塚古墳や周辺の古墳の内容について検討し、同型の画文帯神獸鏡を共有する関係となる2つの集団の関係性に迫ってみたい。

(1) 八幡観音塚古墳

八幡観音塚古墳は高崎市の西端で安中市板鼻に接する旧碓氷郡八幡村大字八幡の地にある。南方に碓氷川、北方に烏川が東・東南の方向にそれぞれ流れており、2つの川に挟まれた東西に細長い台地の地形を呈している中の浅い谷間に築造された古墳である。「八幡」の地名のもとになった上野一社八幡宮も「群馬八幡」駅から西北西約750mの位置にあるが、古墳群はさらに西2km程度の位置になる。平塚古墳・八幡二子塚古墳については後述するが、この2基の前方後円墳が先行して築造された後、八幡観音塚古墳が造られる。この3基の古墳群の北西約1kmに若田古墳群、北北東約1kmに剣崎長瀬西遺跡の2つの古墳群が所在している。いずれも観音塚古墳の所在する谷間の北側の台地上に立地している。

さて、八幡観音塚古墳の内容に逐次触れていきたい。まず、墳形であるが、前方部が大幅に発達した前方後円墳であり、前方部幅・前方部墳頂の高さは後円部を大きく超えている。墳丘の長さ96m、後円部の径48m・高さ12m、前方部幅91m・長さ49m・高さ14m、くびれ部幅76.4mである。古墳は前方部を西に向けており、後円部に南に開口する両袖型の横穴式石室をもつ。石室は自然石乱石積みで造られており、全長15.3m、玄室長7.45m、羨道長8.14m、玄室の最大幅3.55m・高さ



第1図 八幡観音塚古墳周辺の主要古墳

2.8m、羨道の最大幅1.95m・高さ2.30mを測る。「巨石巨室」の石室であり、玄門部と玄室中央に角閃石安山岩の梱石が設置されている。玄室を手前と奥に分割して複数回の埋葬に備えたものと考えられる。承台付銅鏡2種2点・通常的大型銅鏡2点、花形鏡板付轡と花形杏葉のセット、鹿角製鑢轡1・環状鏡板付轡3以上、鉄地金銅張雲珠3、鈴付金銅張雲珠と鈴付金銅張辻金具のセット、金銅製心葉形透彫杏葉4、鏡用の兵庫鎖2・吊金具3、銀装圭頭大刀2種2点、銀装鶏冠頭大刀1、銀装刀子装具1セット、鏡は4面あり、画文帯環状乳神獸鏡・獸形鏡・内行花文鏡・五鈴鏡、須恵器甕1・無蓋高坏1・提瓶1・脚付甕1・脚付長頸壺1・長頸壺2・かえりのある蓋2等々多種多量の遺物が出土している(田島1981a)。古墳の年代は、須恵器の型式から見てTK43~TK209型式のカテゴリーで考えるべきであるが、大刀が圭頭大刀中心であり、1点には唐草文を透彫りした鞘金具が伴っているため、初葬期が6世紀後半でもやや新しい年代となり、2~3回分の追葬を考えるべきであろう。したがって、年代の下限は当然7世紀前半代のやや新しい段階まで幅をもって考えておきたい。

須恵器は「かえり蓋」以外はやや古手と見ることができるので、大半が初葬期の遺物、承台付銅



第2図 八幡観音塚古墳測量図
(縮尺1 : 1,000)

鏡や心葉形透彫杏葉等は7世紀に下りそうなので、追葬期の遺物と考えてよいであろう。馬具は花形鏡板・杏葉のセットを最新の追葬期と考えることができそうであるが、全体としては新しい時期に降りていきそうである。墳丘に円筒埴輪・形象埴輪が樹立されていたこともわかっているので、築造当初の時期が7世紀にまで下ることはないと思われる。ちなみに、前方後円墳研究会の共通編年(以下「共通編年」とのみ記述する)でも、この古墳は10期の後半に属するとされている(加部・橋本1996)。

問題の鏡であるが、6世紀末近い年代にまで製作されているものはないので、すべて伝世鏡であ

る。画文帯神獸鏡は5世紀以前、その他は6世紀代以前と考えてよさそうなので、最初に鏡を入手したのは八幡観音塚古墳に大幅に先行して築造された古墳の被葬者であるのは間違いなし、埼玉稲荷山古墳礫槨被葬者と直接的交渉をもった可能性があるのもそれらの被葬者であろう。

そのため、稲荷山古墳とこの古墳周辺の歴史的関係性に関しては、先行して築造された2基の大型前方後円墳、あるいは周辺の古墳群とのかかわりを追求しなくてはならないことになる。

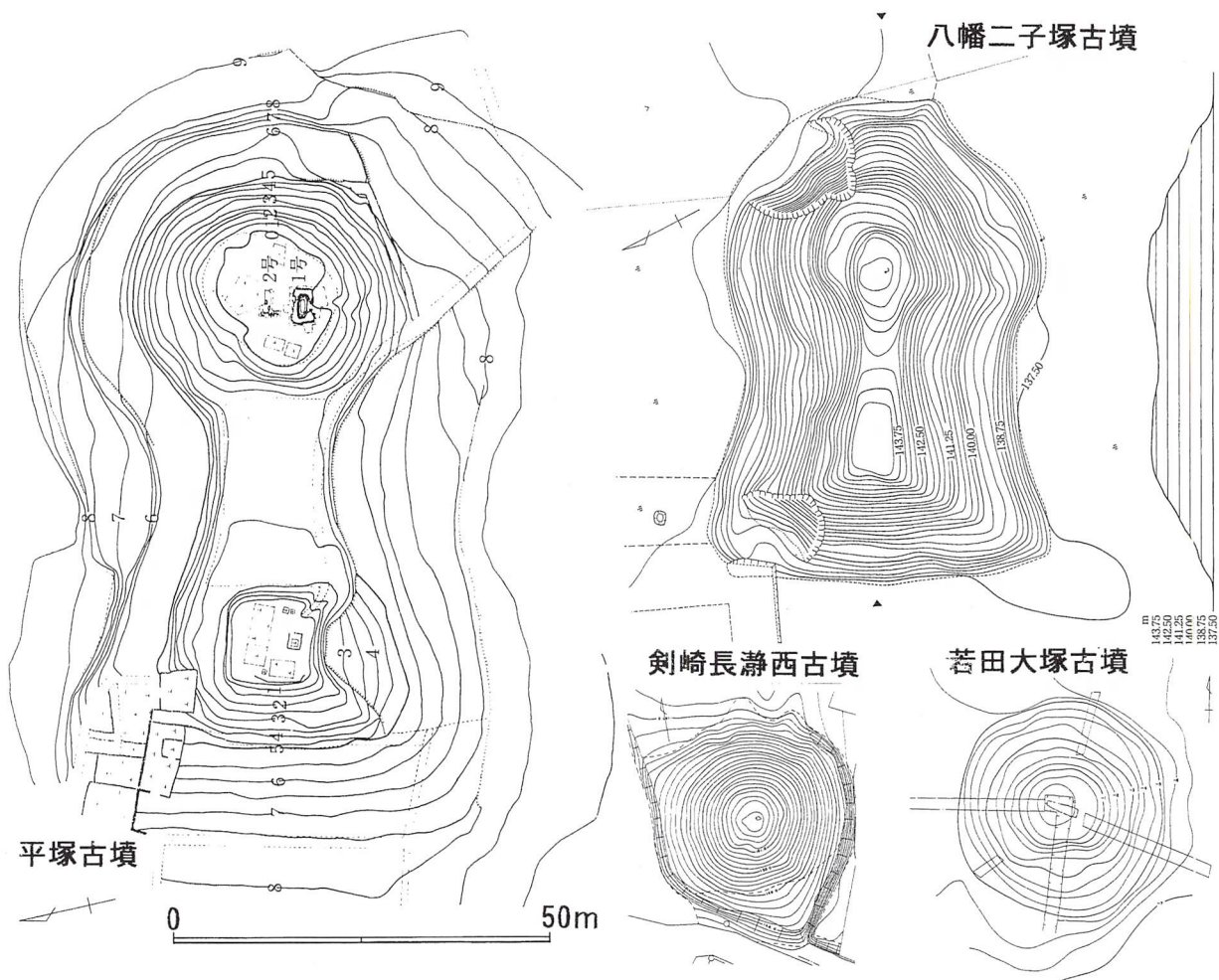
(2) 平塚古墳・八幡二子塚古墳

八幡観音塚古墳の近傍には平塚古墳・八幡二子塚古墳の2基の大型前方後円墳がある。常識的に考えれば、この3基で首長墓系列を形成しているということになるが、途中で大型古墳の空白期が生じる可能性がある。これを他地域の古墳を充当して考えるか、この3基の古墳の埋葬継続期、つまり「追葬期」として解決していくかは今後の課題となるだろう。

平塚古墳は観音塚古墳の南西約300mの位置に所在する。観音塚古墳が谷間に造られたのに対し、この古墳は台地の頂部に位置している。やはり前方部を西に向けている。墳長105m、後円部径66m・高さ9m・頂径36m、前方部幅56m・長さ47.5m・高さ7m、くびれ部の幅56.5mを測る。1957年に後円部墳頂を中心とした発掘調査が行われ、古墳の主軸方向とほぼ平行する方向の埋葬施設として舟形石棺2基が検出された。南側の1号石棺は凝灰岩製で、長さ2.54m、最大幅0.97mを測る。東西5.2m、南北3.4mの長方形の「掘りかた」の中央に置かれ、転石で石子詰になっていた。石棺の周囲は棺本体の曲面に合わせて入念な石組みになっており、棺本体から離れた位置は大小の石をやや雑然と詰め込んでいたという。蓋はなかった。棺身の小口にあたる東西両端部には2個ずつの縄掛突起がある。「掘りかた」底面に並べられた平石上に相当量の凝灰岩の削りかすが散布していたため、石棺安置後に現地で最終加工したらしい。2号石棺周辺は墓地となっていたため、十分な調査がされていないが、同様の埋葬施設の造成が行われていたと考えられている。石棺自体の大きさは長さ3.08m、幅0.9mを測る。こちらには蓋が残っていたが、蓋には人が出入りできそうな盗掘孔が開いていた。1・2号石棺とも盗掘が著しく、遺物は1号石棺周囲の石積みから挂甲小札が少量見つかったのみである。古墳の年代は5世紀第4四半期を想定されている。共通編年8期の後半に位置づけられている。ただし、埋葬施設2基ということになれば、埋葬時期の下限は6世紀前半とすべきかもしれない。なお、松本浩一氏は挂甲小札の出土を根拠に6世紀前半築造説をとっている(松本1981)。

八幡二子塚古墳は平塚古墳の東約300m、観音塚古墳の南東約300mの位置にある。やはり主軸を東西にとり、前方部を西に向けている。墳長66.5m、後円部径41m・高さ9m、前方部幅48m・長さ25.5m・高さ9m、くびれ部幅36mを測る。高崎市教育委員会の小規模調査が2回ほど行われており、円筒埴輪片、人物・馬形・器財埴輪片の出土、大甕を中心とした須恵器の一群19個体の出土が確認されたということであるが、近年刊行の『新修 高崎市史 資料編1 原始・古代1』(右島1999)にも概要の記述があるだけで、詳細情報はない。横穴式石室を埋葬施設とする可能性が指摘されており、加部二生・橋本博文両氏の見解(加部・橋本1996)では共通編年10期初頭頃の時期を想定されている。これだと6世紀後半代となり、平塚古墳との時間差が大きくなり、6世紀前半代の政治勢力の動揺を考慮すべきことになる。

なお、徳江秀夫氏はこの古墳の築造時期を6世紀前半と見ている(徳江2006)。この考え方をとると、逆に八幡観音塚古墳との時間差が50年以上になってしまう可能性が生じる。6世紀中葉前後の



第3図 八幡観音塚古墳周辺の主要古墳
(縮尺 1 : 1,000)

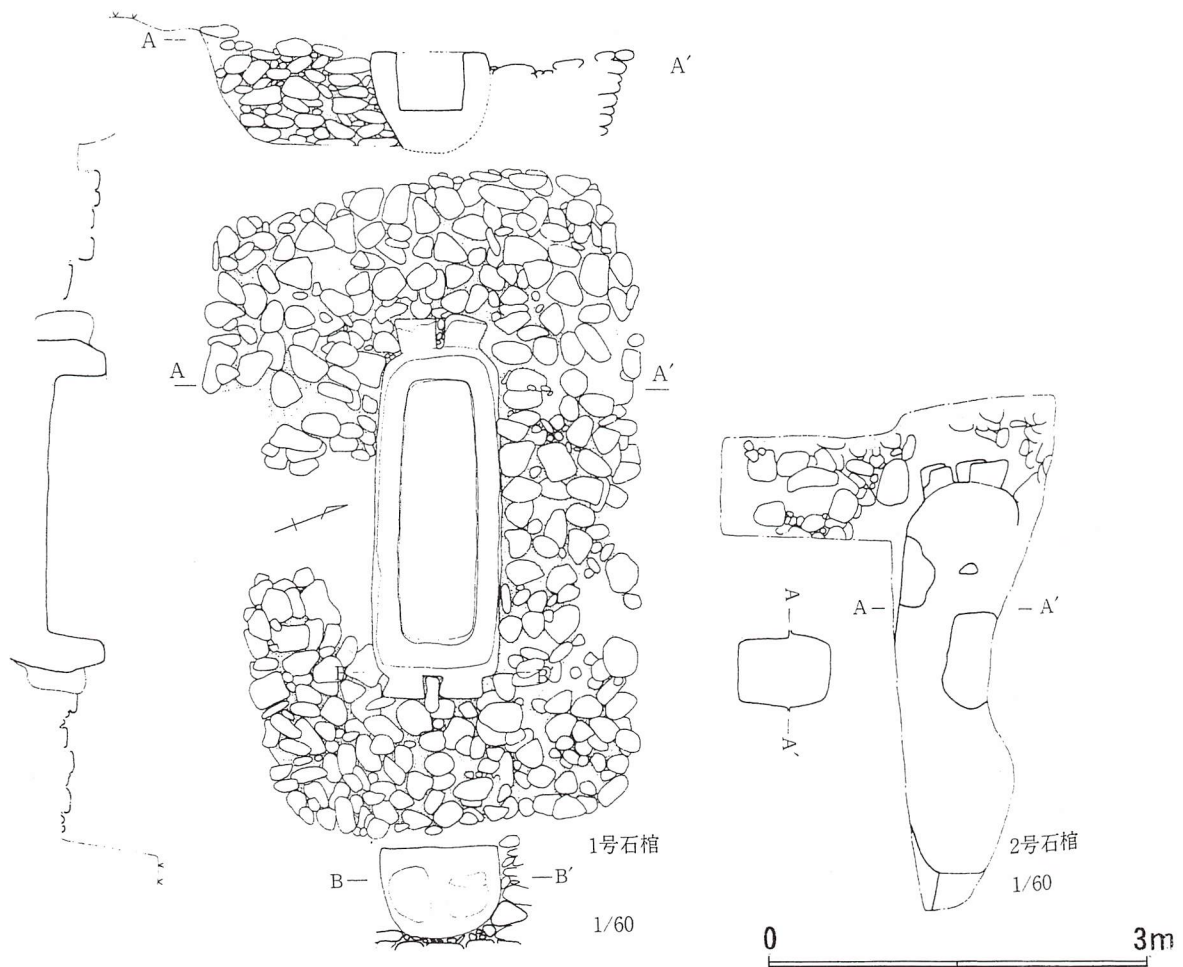
首長墓級古墳の空白の理由を説明することが必要となる。小稿では、加部・橋本説に従って行論することとする。

この2基の古墳では、平塚古墳が埼玉稻荷山古墳と同じ時間帯を共有する関係となり、より詳細な分析を必要とする。しかしながら、埼玉稻荷山古墳が礫櫛一木棺を埋葬施設としていたのに対し、平塚古墳は石子詰一舟形石棺の埋葬施設である。上野西部地域でしかも山岳部に近い地域に5世紀後半代から6世紀初頭あたりの時期に集中的に構築された埋葬施設である、という特異な要素を持つ。この要素での比較はむずかしく、埼玉稻荷山古墳の礫櫛がむしろ利根川水系のやや下った大泉町・太田市、埼玉県側では羽生市にある古墳と共通することとは好対照となる。相互比較の問題についてはさらに後述する。

(3) 周辺の古墳群と八幡観音塚古墳系譜首長層

平塚古墳・八幡二子塚古墳・八幡観音塚古墳の首長墓系列の古墳群が築造された位置の北側の台地上にある古墳群は、規模としては中小規模にすぎないが、内容においては触れないわけにいかないものが多いので、二・三述べておくことにする。

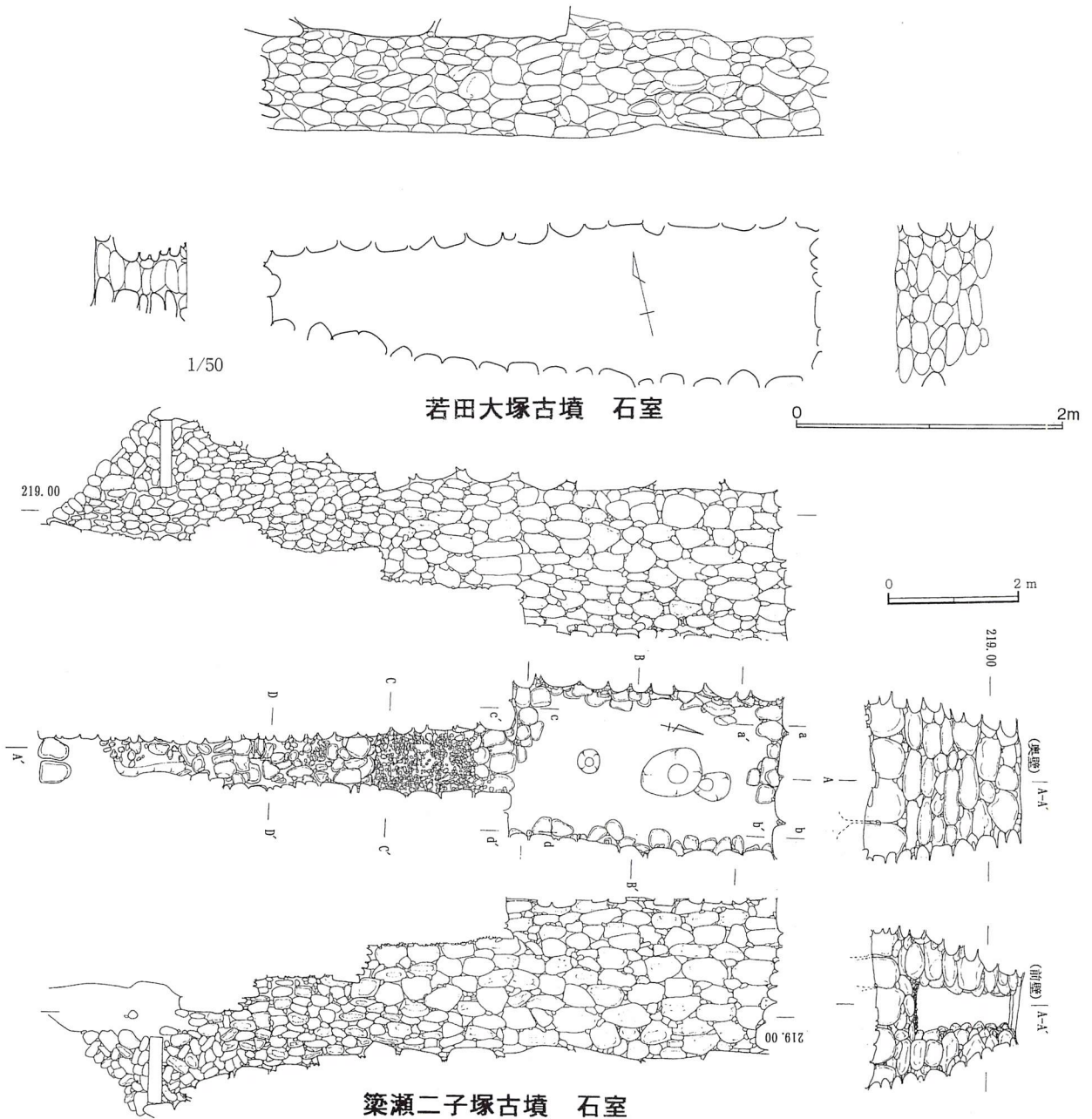
八幡観音塚古墳の北北東約1kmにある剣崎長瀬西遺跡は、5世紀後半以降の集落と群集墳がセットで確認されているが、近年円墳9基・方墳3基・方形積石墓5基・竪穴式小石櫛2基の調査が行



第4図 平塚古墳の埋葬施設
(舟形石棺)

われている。古く1932年に開墾のために遺物の出土が確認された長瀬西古墳は『群馬県史 資料編 3』(梅沢1981)に触れられている規模・墳形は径25mの円墳ということだが、右島和夫氏は径35.5mの円墳ないし帆立貝式古墳とされている(右島2006)。仿製振文鏡1点、滑石製勾玉7点、石製模造品として鏡1・斧4・鎌3・刀子35・白玉一括、三角板革綴短甲1点、鉄銚・石突各1点、鉄鏃20点前後が出土した。埋葬施設は河原石使用の「竪穴式石室」ということらしい。梅沢重昭氏は5世紀後半に位置づけるが、加部・橋本説では共通編年6期(5世紀前半)に位置づけられている。また、近年高崎市教育委員会が調査した小方墳である長瀬西10号墳の墳頂中央付近からは金製垂飾付耳飾1点、韓式系土器の甑の破片が出土したが、これらは朝鮮半島製説もあるような優品である。周囲に確認された集落跡にも韓式系土器の破片が散見し、初期カマドも確認された。また、馬を埋葬した土坑も確認されたことから、この集団は馬匹生産・管理にも関与したと考えられている(黒田2000、右島2006)。これらから、長瀬西遺跡の居住者・古墳被葬者たちは渡来系集団であると認識されている。しかも、短甲出土古墳を含むことから、前方後円墳に準じた古墳を築けた集団とも考えられている。いずれにしても、平塚古墳被葬者の傘下において生産活動を行っていた渡来系集団と見ることができそうである。

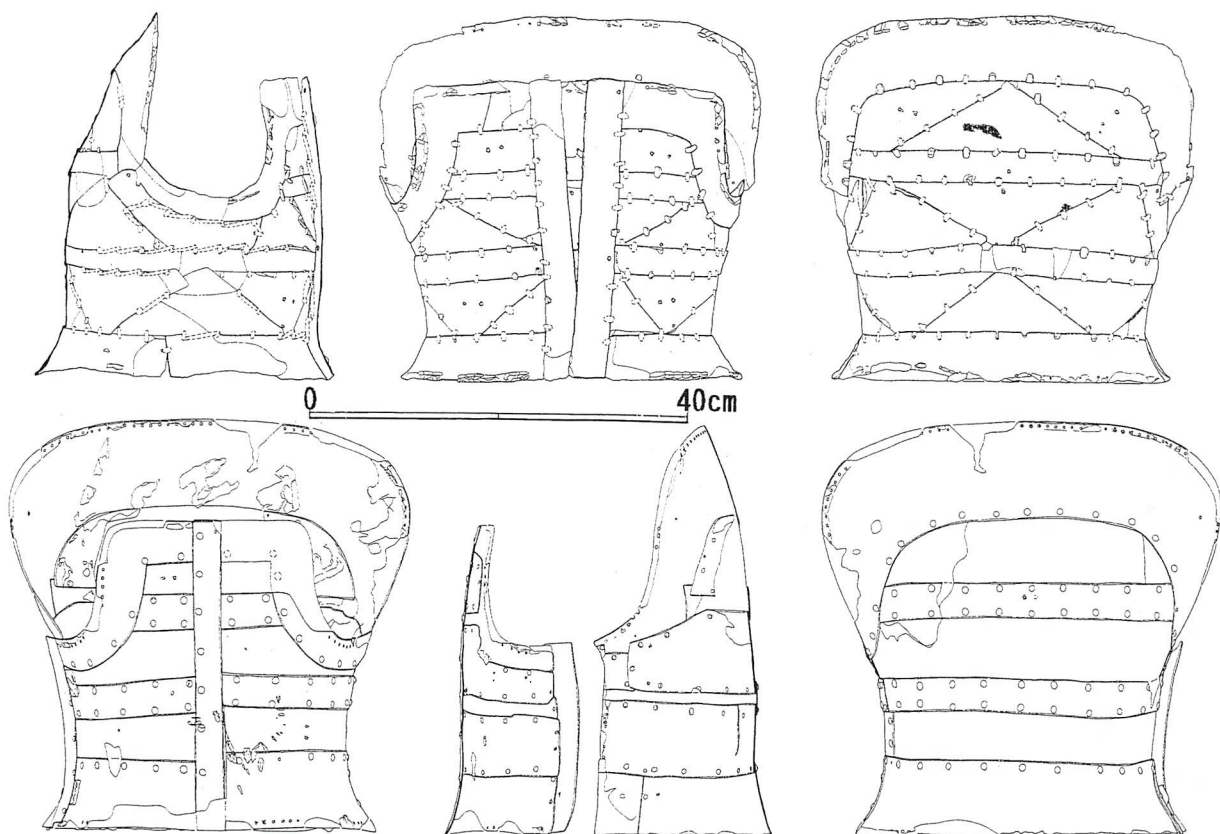
同じ剣崎の地には、まとまった量の石製模造品を副葬した中規模の円墳である、剣崎天神山古墳



第5図 若田大塚古墳「竪穴式石室」・
築瀬二子塚古墳横穴式石室

(円墳、径30m)が、長瀬西遺跡に先行して5世紀前半代のやや古い時期に築造されたことが知られている。

八幡観音塚古墳の北西約1kmにある若田古墳群には、横穴式石室を埋葬施設とするやや大きめの円墳がいくつか内容が判明している。若田大塚古墳は径29.5m・高さ7.5mの円墳で、東西方向に主軸をとる「竪穴式石室」とされる埋葬施設を有していた。この埋葬施設は長さ4.25m・最大幅1.22m・高さ0.71mを測る。墳丘基底部(基壇)に構築され、墳頂部から石室底面までは5.76mを測る。高崎市教育委員会調査以前に横矧板鋌留短甲・鉄鉾が出土しており、高崎市調査でも鉄槍が出土している。この「竪穴式石室」は河原石で側壁を積んでいる。石積みの手法が安中市築瀬二子塚古墳・同市後閑3号墳の横穴式石室に類似しており、西側の短壁が狭く、全体の約半分になる東寄りの部



第6図 長瀬西古墳 三角板革綴短甲（上段）・
若田大塚古墳 横矧板鋌留短甲（下段）

分が「玄室」のごとく幅広に造られている。西壁が入口になれば、初期横穴式石室とまったく同じ構造となるという。田島桂男氏も右島和夫氏もともに同様の見解をとっている。時期に関しても両氏とも6世紀初頭説である(田島1981b、右島2006)。しかし、横矧板鋌留短甲は6世紀に年代の下るものはあまり多くはないと考えられるので、この古墳も5世紀末頃あたりに年代遡及できるかもしれない。古墳の規模は大きくないが、平塚古墳と八幡二子塚古墳をつなぐ時期に造られると考えることができれば大変示唆的である。

剣崎・若田の台地上の古墳群は、平塚古墳以降の首長墓系列に先行して造られる古墳も含みながら、大筋では並行して築造されている。まさにこの小地域の首長墓群の基盤となる集団が形成されたと考えることができる。その内容を見る限り、渡来系集団をも包摂するものであり、近隣地域である安中市域の築瀬二子塚古墳のような初期横穴式石室を埋葬施設とした前方後円墳を築造した勢力にも通ずるのではないかと思う。

ところで、参考のため、安中市築瀬二子塚古墳にも少しだけ触れておこう(右島2001)。八幡観音塚古墳の首長墓系列が所在する地域から碓氷川を遡って8km上流域の安中市築瀬字八幡平にあり、やや離れているため、平塚古墳・八幡二子塚古墳には関係が薄いように見受けられるかもしれないが、この古墳が築造された地域には先行する古墳がほとんどなく、墳長80mのやや大型の古墳であるにもかかわらず、突如出現した印象のあるものである。後円部に輝石安山岩の転石を使用した、河原石乱石積みの横穴式石室を有する古墳であり、石室内部からMT15型式に相当する須恵器の一群を伴っていたことから6世紀第1四半期の時期の築造と考えられており、関東では最も古く造ら

れた横穴式石室と考えられている。先述したが、この石室の側壁石積み手法が若田大塚古墳の「竖穴式石室」と類似しており、築造時期が近接していることから、これらは関係が深いと考えてよいだろう。ただし、築瀬二子塚古墳の横穴式石室の側壁内面には大量の赤色顔料が塗布されていたのに対し、若田大塚古墳の「竖穴式石室」は壁面への顔料塗布は確認されていなかった。若田大塚古墳が先行して初期横穴式石室的埋葬施設を構築した後、築瀬二子塚古墳がやや遅れて本格的横穴式石室の構築に至った、と考えた方がよいのではなかろうか。

3 埼玉稲荷山古墳被葬者と八幡観音塚古墳系譜首長層

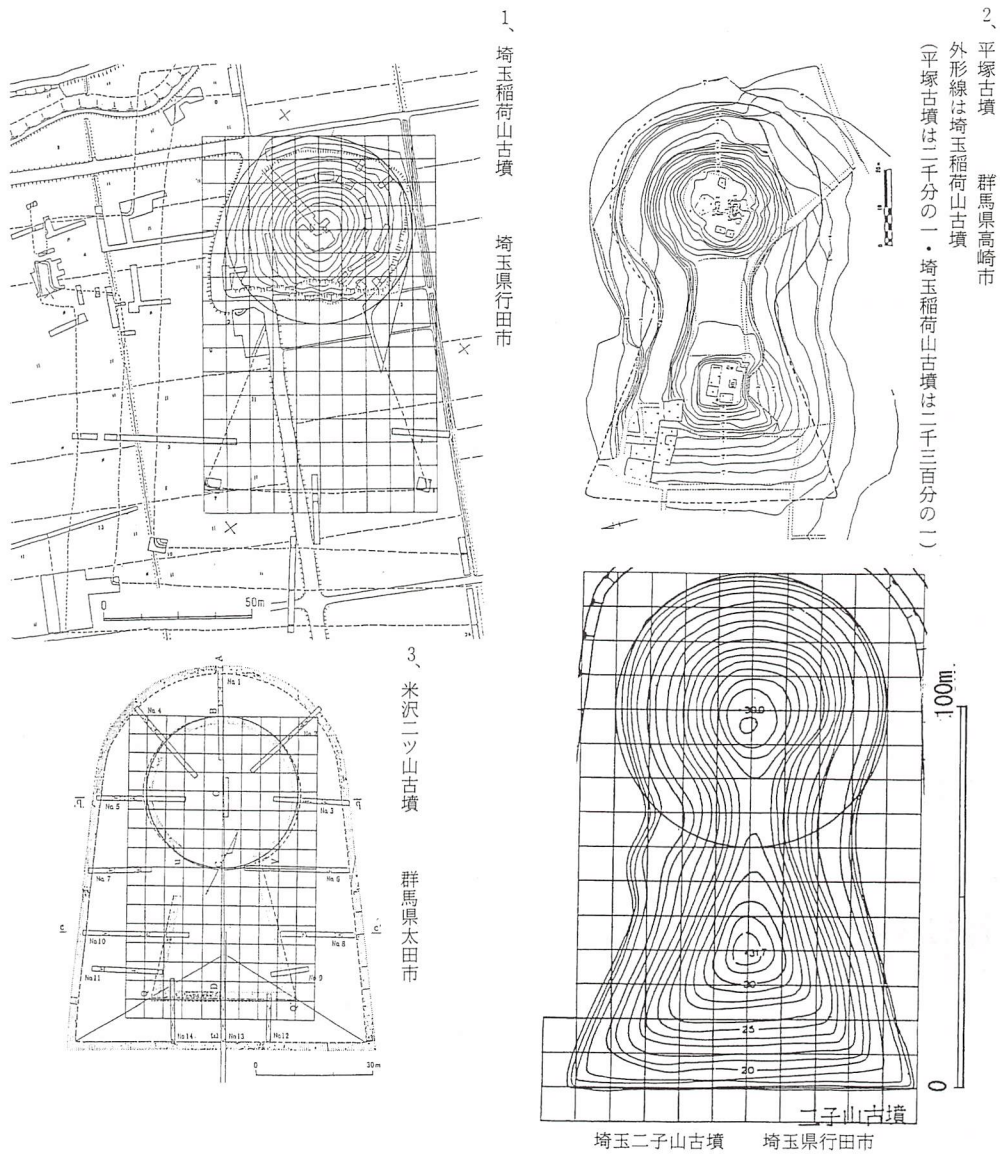
本節では埼玉稲荷山古墳の諸要素・諸属性と八幡観音塚古墳の首長墓系列を構成するいくつかの古墳に関して、若干触れてみたい。

まず、画文帯神獸鏡である。最近刊行された川西宏幸氏の分析（川西2004）によると、埼玉稲荷山古墳・八幡観音塚古墳に副葬された2面を含む合計6面の画文帯環状乳神獸鏡（画文帯環状乳神獸鏡B）は、文様の中の範傷の共通や進行から埼玉稲荷山鏡・大多喜鏡は原鏡が同じで、残る4面はやはり原鏡が同じとなる。しかもこの2つの原鏡は同範ということになるという。そうなると、この鏡群は、中国鏡説で考えれば、同時に入手したものかどうかはわからないにしても、ヤマト王権から配布された「威信財」（=宝器？）と考えてよければ、ある一定の時期に集中的に入手（輸入）した一群と判断されることは許されるだろう。埼玉稲荷山古墳被葬者と八幡観音塚古墳系譜首長層の双方がほぼ同時期にヤマト王権の本拠地（シキの宮？）に上番し、大王や中央首長層の従者として活躍するに及んで、王権中枢から勤務評定の結果として賜与される財物の中にこの鏡が含まれていた、という解釈が可能となる。

次に、前方後円墳の設計企画論である。飯塚卓二氏は埼玉古墳群の成立過程を考察するのに、前方後円墳の設計企画論を中心に考察した（飯塚1986）。この時飯塚氏が依拠したのは石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川 徭の四氏の共同研究である、後円部径を8分割した長さを基本単位とし、前方部長をその単位の長さの何倍かで考える「区」の設定論であった。八幡観音塚古墳の首長墓系列のうち、平塚古墳は埼玉稲荷山古墳と同じ「7区型」であり、稲荷山古墳の「相似墳」である、という。また、同じ「7区型」には太田市米沢二ツ山古墳もある。飯塚氏は平塚古墳と埼玉稲荷山古墳の画文帯神獸鏡の「同型」（飯塚氏は「同範」）であることに関して「同盟の証」と評価した。また、埼玉稲荷山古墳の地理的位置から、米沢二ツ山古墳以外の前方後円墳がないことにより「かつて太田天神山古墳の被葬者が直接の基盤としていたと推定される太田市街地付近から利根川にかけての肥沃な地域」を、「埼玉稲荷山古墳の同盟（同族）者」が掌握したことにより、「かつての毛野中枢部」を制圧し、新秩序を形成した、と考えた。「毛野地域政権」の解体とも表現している。

埼玉稲荷山古墳と平塚古墳が「相似墳」の可能性があり、画文帯神獸鏡という宝器の要素の共有についても関係するという点に関していえば、飯塚氏の見解は当たっているかもしれない。ただし、前述したように舟形石棺を埋葬施設とする大型古墳が上野西部に集中的に築造されることを一つの政治権力の形成に関連すると考える右島和夫氏の見解（右島2002）を尊重するならば、「毛野地域政権」の解体ではなく、上野西部地域を中心とした再編成と捉えた方がよいかもしれない。

私の見解としては、埼玉稲荷山古墳の出現は、上野地域の政治勢力の新たな結集に重要な契機を与えたが、すでに大型古墳を築くことができなくなった太田市付近の地域に関しては、「制圧」



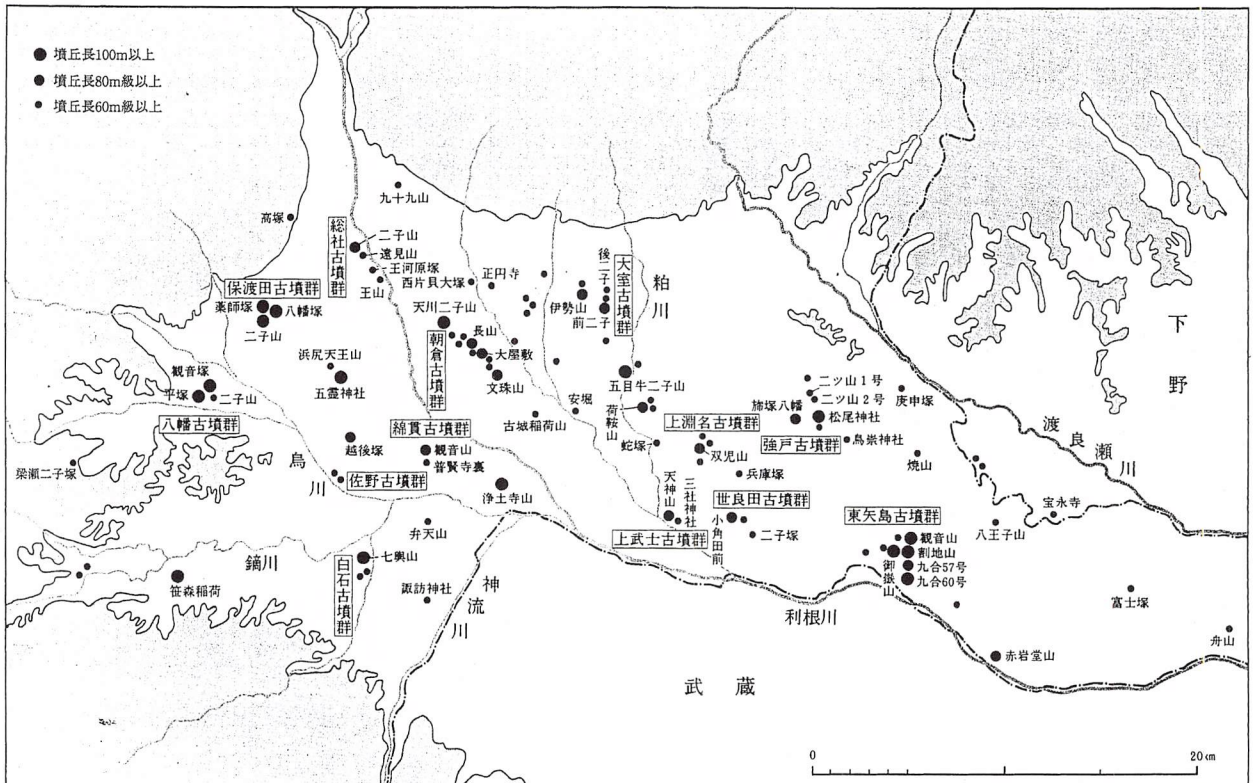
第7図 埼玉古墳群と群馬の「7区型」古墳
(飯塚1986から抜粋、縮尺不統一)

と言うほどではなく、共通する埋葬施設を築かせることにより、やや優位な立場に立つ「同盟」ないし「連合」の関係と考えるべきではないか、と思っている。

4 おわりに —サキタマ王権の形成に関する一、二の問題—

以上、八幡観音塚古墳の首長墓系列とその周辺古墳群と埼玉稲荷山古墳との関係から見てきたことの一端に触れてみた。

従来、埼玉古墳群の形成との関わりで述べられてきた群馬地域の大型古墳には、旧群馬町領域にある高崎市保渡田古墳群と、前橋市の東部地域の太室古墳群、藤岡市七興山古墳等があげられる場合が多かったと思う。七興山古墳については、『日本書紀』の緑野屯倉設置伝承と首長墓築造の結びつき、保渡田古墳群・太室古墳群は、埼玉古墳群と同様、それまで有力古墳群が形成されなかった地域への新たな造墓、という埼玉古墳群との共通点を歴史的に捉えようとしたのである。しかし、



第8図 群馬地域における後期大型前方後円墳の分布

古墳自体の属性や遺物に見られる共通性等を見る限り、これらの古墳群と埼玉古墳群の関係性が特別深いものとは思えない。むしろ、今回取り上げた八幡観音塚古墳系譜首長層と埼玉古墳群被葬者層の関係性にもう少し着目すべきだろう。また、飯塚氏が指摘（飯塚1986）するように、埼玉稲荷山古墳は、利根川水系の両岸に所在する属性を共通するいくつかの古墳との関係を考えることができるわけである。地理的位置から考えてもあまり上野西部地域のみから考えるのは正しくないかもしれない。しかし、太田市域周辺等では後期後半の東矢島古墳群が築造されるまでの間首長墓級大型古墳の空白期があるとされているため、埼玉稲荷山古墳出現に直接的なインパクトを与える古墳はなく、上野西部地域優位の時期の中で稲荷山古墳に直接的関係性を追求できるのは、やはり八幡観音塚古墳首長墓系列とならざるをえないのではないだろうか。

小稿は埼玉稲荷山古墳に関係性をもつ大型古墳を抽出することを目的としたものであり、中小規模の古墳についてはあえて等閑視した。剣崎・若田・八幡の台地上ではかなり多数の古墳が調査されているので、もっとそれらの分析をする必要があるのではないかと批判があらうと思う。しかしながら、論文の冒頭に触れたように、大型古墳同士の関係性、つまり首長間交流・首長間交渉が証明されることを第一の目的としているのである。大型古墳と中小古墳の関係は直接的に可能かどうか、可能であるとすればそれを従属的な関係と見てよいか、という視点を媒介しなければ、集団間交流の史的 position を決めることはむずかしい。たとえば剣崎・若田の古墳群と埼玉稲荷山古墳の関係性を追求することは、わずか20m規模の古墳と100m級の大型古墳の関係ということになり、おのずから対等の関係と見ることはできない。そのため、「八幡観音塚古墳系譜首長層」とした平塚古墳や八幡二子塚古墳と、埼玉稲荷山古墳やそれ以後に築造された埼玉二子山古墳等の関係性

から、これら中小古墳群との関係を派生的に考えねばならない、ということになる。

なお、最後の挿図は白石太一郎氏が1999年に群馬県埋蔵文化財調査事業団20周年記念の公開講座で記念講演を行った時の資料中に掲載されていたものであるが(白石1999)、今回取り上げた古墳の地理的位置がわかりやすく表現されているので、小稿の主旨に直接関係あるわけではないが、参考のため掲げておく。

5世紀後半から6世紀という古墳時代東国史の大転換期を、大筋として新興勢力論を考えることによって解決しようと企てるのは、おそらく正しいし、重要であるかもしれないが、歴史の本質的転換を見極めるには、たとえ極めて細い「導きの糸」だったとしても、古墳自体の諸要素から確認される共通点を追求する方が、迂遠には見えても実は正解に近づく王道ではないか、と考えている。今回はあまり問題の掘り下げができなかったが、6世紀前半段階を中心とする時期の北関東諸地域及び南北武蔵地域の大型古墳築造動向を再検討することをひとまずの目標とし、小稿を閉じたいと思う。

《参考文献》

- 甘粕 健 1970 「武蔵国造の反乱」『古代の日本 7 関東』(旧版) 角川書店
- 飯塚 卓二 1986 「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』3 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 梅沢 重昭 1981 「長瀬西古墳」『群馬県史 資料編3 原始・古代3 古墳』群馬県
- 加部二生・橋本博文 1996 「上野の前方後円墳」『第1回東北・関東前方後円墳研究会 東北・関東における前方後円墳の編年と画期 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 川西 宏幸 2004 「画文帯神獣鏡」『同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築—』同成社
- 黒田 晃 2000 「剣崎長瀬西遺跡と渡来人」『高崎市史研究』第12号 高崎市
- 近藤義郎編 1994 『前方後円墳集成 東北・関東編』山川出版社
- 白石太一郎 1999 「古墳から見たヤマト王権と東国」『創立20周年記念 公開考古学講座』(資料集) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 田島 桂男 1981 a 「八幡観音塚古墳」『群馬県史 資料編3 原始・古代3 古墳』群馬県
- 田島 桂男 1981 b 「若田大塚古墳」『群馬県史 資料編3 原始・古代3 古墳』群馬県
- 利根川章彦 2002 「稲荷山古墳の築造年代に関する覚書」『調査研究報告』第15号 埼玉県立さきたま資料館
- 利根川章彦 2003 「『武蔵国造の乱』はあったか—6世紀前半以降の上野・武蔵地域の政治勢力の所在—」『調査研究報告』第16号 埼玉県立さきたま資料館
- 徳江 秀夫 2002 「群馬県における前方後円墳の地域性」『第7回東北・関東前方後円墳研究大会 《シンポジウム》前方後円墳の地域色 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 徳江 秀夫 2006 『観音塚古墳の世界—きらめく大刀、馬具、装身具—』(展示図録) 高崎市観音塚考古資料館
- 樋口 隆康 1980 「埼玉稲荷山古墳出土鏡をめぐる」『考古学メモワール1980』京都大学考古学メモワール編集委員会編 学生社
- 松本 浩一 1981 「平塚古墳」『群馬県史 資料編3 原始・古代3 古墳』群馬県
- 右島 和夫 1999 「八幡二子塚古墳」『新修 高崎市史 資料編1 原始古代1』高崎市
- 右島 和夫 2001 「築瀬二子塚古墳」『安中市史 第四巻 原始古代中世資料編』安中市
- 右島 和夫 2002 「古墳時代上野地域における東と西」『群馬県立歴史博物館紀要』第23号
- 右島 和夫 2006 「6世紀関東の古墳文化と武器」『第7回古代武器研究会 資料集』